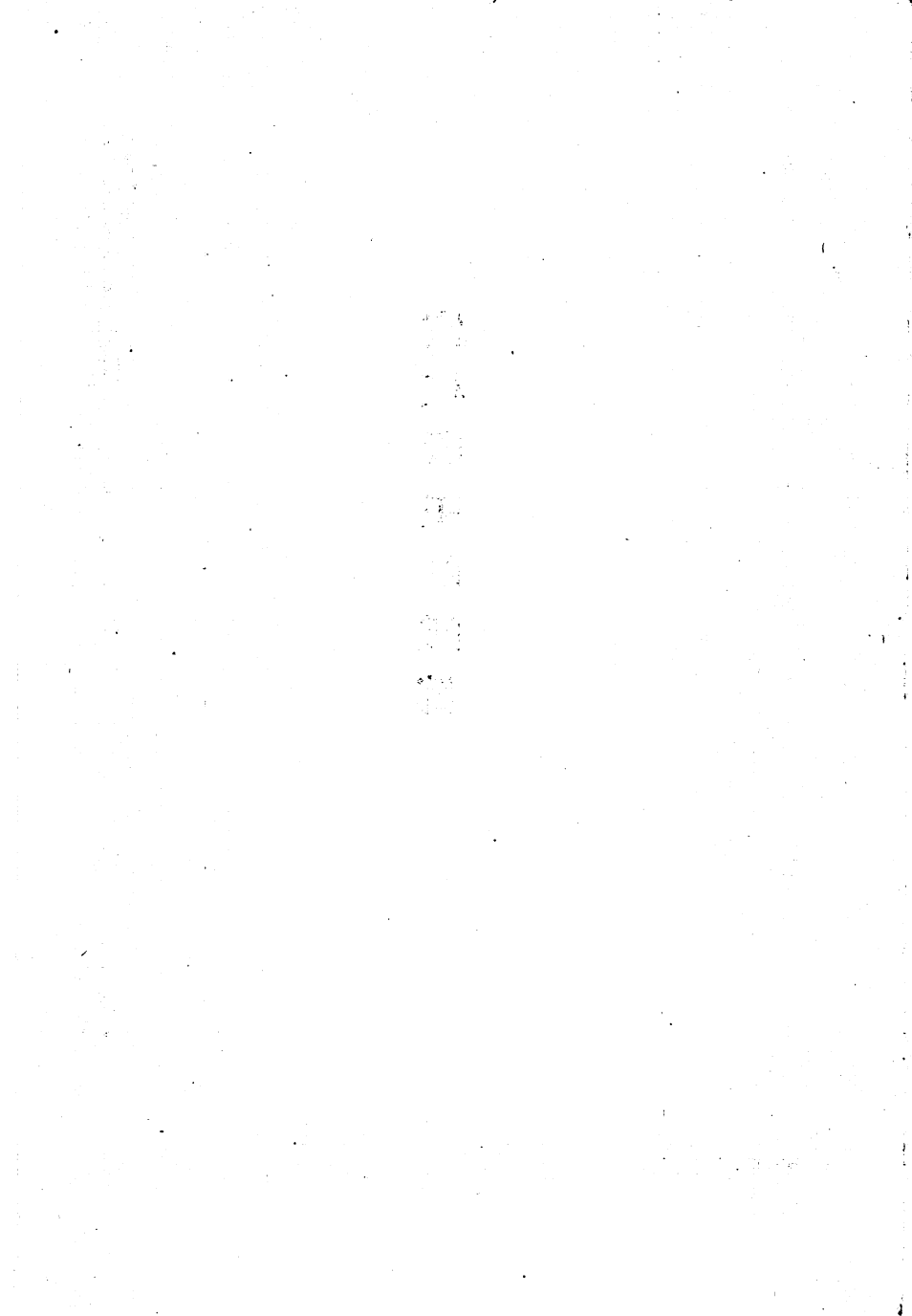


富仁親王嵯峨錦



富仁親王嵯峨錦

作者 紀海音

摩訶山は高きにあざれども。仙あれば即ち名あり。水は深きにあざれども。龍あれば即ち靈なり。鷹山の瀟孤山の梅。李伯和清が愛吟より。其名も高き日の本や。百世重なる天皇の。徳は富仁親王の。オロシ政事こそ。やごとなき。色香も榮ふ御齡。まだ廿年の若草に。籠るてふその業平に類へる玉の御形。風雅の名さへ著き永享元年暮秋の空。千世の古道嶮峨紅葉行幸の車大井川。汀に向きて玉座を占め御遊覽とぞ聞えける。供奉の卿相雲客より菅家江家の儒士博士。連る袖の色替へて。末座に簞目の千王丸。今日の舍人を蒙り強力不敵の若男。瑤輿を守護し坐したるは。フシいかめしう。こそ見えにけれ。地色中にも關白兼定公劔取直し謹んで。詞物として捨てざるは天地の公。君のめぐみの深き事八入に照れる紅葉も。景色を添へ候と壽き立てゝ奏せらる。地色親王御機嫌麗しく朕太平の餘風を慕ひ。往昔仁明天皇の。芹河の行幸に準へ。詠歌の興に君と臣相和きて樂しみを。下に施す一節と思し入りたる和歌の題紅葉水に映るとの御製は斯うぞ聞えける。もみぢ葉の影も流れず大井川。散らぬ梢を筈にして。地添くも御宸翰御短冊に染め給ひ。都の錦名所の褒美に何か惜しまんと。流れに添うて投げ給ひいざや面々目前の。趣向はいかにと宣へば。兼定公を初めとし我もくと公卿達。長歌短歌混本歌。詩通句漢和俳諧口。千言萬句綴り添へ色紙短冊とりとに。浪に浮みし有様は陸奥山の黄金花。オクリ入日へに洗ふ如くなり。地色入興の餘り人々はヤア千王丸。調日頃は無骨なりとても今日の瓊筵に。一人洩るゝは一座の恥流行歌の一句でも。覺えた事を書き出だせいかにと宣へば。地ハツト答も荒男のつさくと御前に出て。調分相應の役目には川波に飛込んで。或は水練立游観覽に供

へんと肌に。油を乗せたるに。存じの外の御所望迷惑至極さりながら。地御恥辱とある上はたつて辭退もいかゞなり歌や連歌は氣がかはらず。わつさりとやつてくりよ。歌韻田川にはちんちり紅葉を。流すよほんをさととさよんよえ。ナホス君を始め奉り。フシ各興に入り給ふ。地色時に尾上の方よりも紅葉につれてちら／＼と。吹かれて來る板繪馬御前にこそ落ちにけれ。地親王取上げ見給へばいと細やかなる彩色に。美女の姿を畫きなし願主狩野の雪姫と。讀み終つて宣ふは。詞女の繪師と譽ある雪姫が筆ずさみ。地聞くに勝りて妙なるかなかゝる器量を蓬生に。埋もれ置こそ本意なけれ。まだ獨居にあるならば宮仕をも勧めめよかし。兼定いかにと繪言あり。詞さん候此雪姫儀は。某が家臣膳手織部が娘。折を伺ひ御階迄召連れお目見え遂ぐべき所。丹青修行に暇なく空しく打過ぎ候なり。又此繪馬は雪姫がわりなき夫婦の其仲に。子を設けたき祈願により我姿を書寫し。松の尾の明神へ奉納せしと聞きつるが。地山嵐に誘はれ君の御手に入りし事。民の子を安んずる願成就の吉相と。フシ委細にこそは奏せらる。地色親王由を聞し召し。なに此繪馬は雪姫が姿筆に寫せしとや。心にくやゆかしやな彼が風流聞くにつけ。夫が知り度し何者と勅諭あれば兼定公。詞されば候何時頃より。馴れ馴染しは知らねども夫はあれなる千王丸。地委しき契は召出して御尋ねあれかしと。座興を交せて勅答ある。親王世になく打笑ませ果報いみじき千王丸。骨柄に似ぬやさ者よな汝が癖の腕立にて。雪女は仕留めうが雪姫には消え／＼と。なだれて溶けて何時の間に子持と迄はしたゝるき。願ひごとやと冥加なき御戯れの言の葉に。もぢ／＼として千王丸フシ顔を赫めて居たりけり。地色爰に蟠海僧都とて親王の御兄宮。高雄にまします御許より百濟師國使者として。玉座間近く畏り。河邊の行幸先達つて。主君僧都承り幸ひ御寺も程近し。所は名に負ふ高雄の奥。春を欺く紅葉は此地の及ぶ事ならず。地旅宿の席を相構へ臨幸願ひ奉る。御迎ひに參上とフシいかめしげにぞ申しける。地色兼定公は豫てより僧都の惡心察する上。今師國が面魂害を含むの計略と心に込めて宣ふやう。詞ム、御連枝の因みとて思し寄つての御招待君御觀感さりながら。逸遊逸豫の樂みも過ぐれば民の煩ひたり。

此地への行幸は先例を追ふ所。高雄に一宿あらん事安きに誇る誅を受け。朝政事怠らば下の訴へ滞り。君一人の御過無益の結構叶ふまじと。言葉正しく返答ある。師國頭を上げ。コハ心得ぬ御言葉差當つて御兄宮。御慈の招待に四の五のあるは無禮の沙汰。地又朝廷の行ひも天子に代る關白殿。御一宿の其間捌きに違亂あるべきか。近頃狭き胸中とフシ嘲笑う。てぞ居たりける。地色親王つくく聞し召しげに同胞の睦まじき。使がねとは言ひながら。政事には替へ難し。高雄山の風景より民の露の賑ふこそ。朕が詠めの紅葉なれ外に求むる樂しみなし。歸りて此旨申せよとフシ悠々としておはします。地色師國消息はつとつぎ。詞天知る地知る人知ると何處ともなしの取沙汰に。親王の御事はもとより女帝にまします故。廿歳を過ぎ給ひてもお后もなく女御もなく。華奢風流の御容顔合點が行かぬと思ひしに。關白殿を始めとし登山朕がり給ふ事。高雄は女人結界故行き詰つての言葉争ひ。尤もかな知れたく。地よしは女帝にあらばあれ其時こそ僧都の行力。いかなる魔障ありとても退け給ふは案の内。骨肉の御仲にさのみな包み給ひそと。さも憎さげに言放す。兼定大きに氣色を損じ。詞ヤア勿體なし師國。天子の御身に謂れなき難題を云ひかけるは。汝が當座の難言か但し僧都のお指圖か。出家の御身に惡心のあるべき様には思はねども。地只今の一言にて慈還幸なし難し兎に角還御を急ぐべし皆々用意とありければ。師國は大音聲。詞忝くも蟠海僧都一の宮の命を請け。勅使に等しき某むざ／＼とは歸られず。其上行幸ならんば女帝の噂も廣うなり。世の人口も笑止なり無禮は却つて忠義の道。地否とあるなら玉體を無體に供奉し申さんと。フシ傍を睨んで立つたりけり。地色千王今は堪へ兼ね末座よりつと出て。詞ヤア師國とやらどる國とやらいかつげに喧しい。僧都とは誰がこと。兄弟にもせよ親にもせよ。世を離れたる捨坊主我儘の願ひ事。却つて御遊の妨げし二歳め迄がい／＼と。身體に過ぎたあごた骨捻ぢ歪めんと飛びかゝるを。地は親王は御驛を上げそれ制せよと宣へば。公卿の面々取付きて。オクリ漸々へかしこに押込むる。地は親王玉顔穩に師國が云ふ所やぶさかなるに似たれども。詞女帝となき名言ひ立つる世上の噂捨て置かれず。

地其上僧都へ立つる道直ぐに行幸を催すべし。今日此所へ來たる事誠は朕が下心。紅葉より猶色深き女の風儀を見そなはし。心に叶ふ者あらば貴賤に依らず召し入れて。后に立てん爲なるぞ。然れば高雄山とて。三月廿一日は女人も山へ詣つるとや。來年の例日を明日へ取越して。我參詣の作善のため女人の參りを赦すべし。近國へ相觸れべし僧都の行力頼まねど。佛法王法二つなき朕が許すと云ふ言葉。世界國土の海山も草木もなか背かんと。虎の威あつて猛からぬ君子の。道こそ。三熏末廣き。フン法に形は。地染めながら心は貪慾一の宮幼立より御行跡邪にまします故。押して出家になし參らせ山家の住居朝夕に。無念の焰焚き添へて護摩にふすぼる顔色も。崩黄練の腹巻に筋金入れたる櫂の棒。馬手に掻み飛ぶ如くせきに急いたる目の内に。天地をはつたと脱み付け。調先帝一の王子と生れ萬乗の位に即くべきを。胸慾な親心二の宮を寵愛し。左右の大臣媚びへつらひ親王を位に即け。罪なき我を此如く無體に剃つて剃りこぼたれ。地鬱憤遂に散せんと時節を待ちに待ち畢せ。今日嵯峨の行幸こそ天より我に讓る所。賺し寄せて害せんため連枝の因みを託けに。調師國を遣はせしに待てども歸らぬは。察するところ謀計を關白めに悟られ。からめられしは必定とても露顯の上からは。地討手を持たず逆寄して一戦に勝負せん。フシ方々いかにとありければ。地色岩飛の脱天坊霧間の時夜叉始めとして。前後不覺の惡俗ども異議にや及び候と。勇んで中途に駐け向ふ然る所へ師國。競ひ切つたる戻り道兩方はたと行合ひたり。調僧都怒つて大聲上げ。ヤア噓したるか師國。事延引に及ぶと言ひ親王をも供し來らず。のめく歸る親者兎角の返答聞く迄なし。直ぐに向つて片端しにもの見せんと駈出づるを。師國越つて引留め。お急きなされなぬかりはない。拙者が辯舌武勇にて首尾よく當山行幸の。勅説下り候と仕済し顔に云ひければ。僧都顔色打解け。さぞあらんと思へども。一大事の競口仕損じたるかと氣遣ひたり。地サア彼奴等が命は寢腐つた天が下は一呑みと。勇み躍れば脱天時夜叉共に浮れていきくと。物にも足らぬ公家ばら糖粉を斬るより易い事。手應へのある相手もがな高名をして遊ばんにと。フシ雜言たらふ言ひ散せば。調師國は

頭振り必ず御油斷なさるゝな。親王若くましませども天子の御位備りし。威勢を四海に振はんため結界の地を踏み破り。明日女人の參詣を許すとあるの宣旨こそ。凡慮の及ばぬ御發明。關白もとより智談の臣舎人に笹目の千王とて勇猛無双の若者彼めを拉がぬ其内は。滅多に天下振られぬとにが／＼しげに訴ふる。僧都から／＼と笑ひ。のさばり過ぎた勅諭顔智恵が却つて害となり。身の亡ぶべき前相女人の參詣許こそ。これ此方の究竟一。地智略を以て討ち取らんは何條仕損じあるべきと。手に取る如き廣言に皆手を打ちて領き合ひ。天晴智恵の山ばかり芋掘り坊主にあらざれば。げにさも僧都とそやされて。自慢に鼻も高雄山本坊指して三更歸らるゝ。フシ大君の。勅をば笠に着て。高雄の紅葉踏み分くる。女につれて男すら貴賤群集の摩合も咎めず揺ぐ袖と袖。錦の世界を賑しき。地色參詣多き其中に戀と情の色合は。こんなものと夕顔の昔をかの雪姫は。見おろす程の顔容貌。今日は寢して出立場へ小オクリひり帽子に抱帶しやんと締めたる風俗も。浮れて輕き瓢箪の。腰元仲居風呂敷にちよつと小提の手なぐさみ男思ひの氣配りを。フシ行幸の道を慕ひ行く。地色山の麓に御車の轅に凭れふら／＼と。小居眠りする千王丸退屈らしい舎人役。伽欲しげなる顔付とつか／＼と側に寄り。懷へ手を差入れればびつくりとして大欠伸。詞奴えづなうほされる事。ホウ女房ども。夫の留守の氣儘歩き近頃以て無作法至極。地後生は内でも願はるゝつひ拜んで早歸れと。只一口も仕人なり雪姫は打笑ひ。詞ほんにマア心を知つてゐればこそ。添寄りのない物言ひ。物語は附けたり。女の繪師と云はるゝから屏風掛地の度々に。地櫻は吉野紅葉には高雄の秋を寫せども。目に見ぬ事は覺束なくお許あるを幸ひと。辿る／＼も參りしが。目馴れぬ山の景色より矢張見つけてお前の顔。眺めて遊ぶが面白い。ハアいかう草臥れたちと爰貸してと膝の上。凭れかゝれば突倒し。詞あた見苦しい舌たるい。七尺去つて師の影踏まず。八尺去つて男の顔拜んで居よとは古人の戒め。飛退つて畏れ。フウ仰山な。内證の魂膽は聖人でも同じ事。地こんな處で和いて人に羨がられてこそ。打晴れての女夫なれ。地色ア、まゝよ。地色をんなら獨樂しむじやと立退いて小提重。仲居腰元打交り

フシさいつ おさへつ 酌交せば。地色千王じろく打守りハレいかう氣が盡きた。八尺の内二三尺間には大事もない事と。言葉の下よりそれく。詞ちつとぞうもござるまい。重ねては道なかく抱付くが合點かヲ、後は後目のまへのたつた一杯く。地互にわりなき酒機嫌凭れ合うたる袖袂。頭隠せど尾上より還幸なりと呼ばはつて。親王關白併都送御下山あればうくと。廻る車の前後。オクリ隠れへかてぞフシ見えにける。地色兼定公聲をかけ御許さるゝ苦しくない。罷り出でよとありければ。ハツト答へて兩人は顔見合せてうづくと。フシ玉顔近く畏る。地色親王御氣色麗しく千王が妻雪姫よな。詞風流と云ひ形と云ひ例稀なる繪のたくみ。幸ひ所も高雄山其外古歌に詠み置ける。名所々々の紅葉の色集めて爰に眺め度し。寫して見せよと勅諚ある。雪姫額を地に着けて。詞拙き女のすさみ迄召し上げ給はん綸言は。地身に餘りたる嬉しさも。畏多く候と フシ言葉の品も優しけれ。詞兼定差寄りコレ雪姫。勅諚いかで背くべき。地即ち是に畫けよと扇と硯賜ければ。ハツトばかりに押戴き。墨摺り流し筆を染め。オクリ一々へ次第に。寫しける。先づ紅葉の名所の其色品を自らが。筆の稽古は青葉なる稻荷の山の若楓木の下。闇の フシ繁みより。更け行く秋の。一入に。八鹽の末を契りては長くもがなと命毛の。榮を祝ひ書そめける。次に寫すは鏡山オクリもみぢ。重ねの。色々の伊達を仕立つる襟付も。對の白無垢霜の綿。霧を伽羅とも。燻らせて。世に見せ顔の粧を。フシ心にこめて畫くなり。さて其次はかけまくも。かしこき。神の愛て給ふ。オクリ龍田の。川の波の面渡らば中やたえなんの。御製もげにや一樣にくだし掛けたる唐錦。一際目に立つ フシ眺めとかや。さて又爰に。名にも似ず。笠取山の村時雨盛りて零れてさつくさつと。絶間に。残る虹よりも。朱を見せたる下紅葉。オクリ戸無瀬の。瀧の折掛てめぐり流るゝ粧は。雪ならねども山の帯。風にほどけて日に晒し結び。止めて。止まらぬ秋の行方ぞ惜まるゝ。分てゆかしき風景は。定家卿の住み馴れし昔を爰に小倉山。フシこれ敷島の道しあり。妻呼ぶ鹿も紅葉散る。跡を尋ねてかいと鳴くはしほらしや。さてしほらしき。山里の名所名木とりくに盡きぬ。水荦あらましを。かく

とばかりに□□て御前にこそ差上ぐる。地色親王(皇子)親感淺からず□□□て被物(衣)。數々積る雪姫は御暇下されて、オクリ家路にへこそは歸りけれ。地色然る折節時ならぬ撞鐘しきりに呻り出し。大地も碎け落つる音。フシ山家崩るゝ如くなり。地色各是はと聞く所に山をくだりに百濟師國。息氣を切つて駈來り僧都の前に畏り。詞奴も不思議の事候。當寺の撞鐘故なきに火焰となつて失せ候。いかなる障礙あるやらん急いで歸山遊ばせと。事ありさうに訴ふる僧都ハツト仰天顔。地コハ一大事ござんなれ忝くも此鐘は。宇多天皇の勅願にて橘の廣相。菅原の是善卿藤原敏行。言葉と筆を残せし故世に三絶と稱せられ末代の靈物。今退轉に及ぶ事天下の凶事を示すのか。佛法破滅を告ぐるのかあら氣遣はしの變災と。言ひもあへぬに山上山下太鼓を鳴らし法螺を吹き。脫天時夜又兩惡僧與力の大衆鎗長刀。得物々々をひらめかし遁さぬやらぬと聲々に。親王目がけ取巻いたり。脫天坊真先に進み出て。怒れる眼はつたと見開き。詞ヤア／＼親王よつく聞け。當山神護寺の御事は弘法大師の開基として。眞言秘密の道場。六百餘年の掟を背き天位に任せ時ならぬ。女人の參詣許せし事中興文覺是を怒り。靈魂我に入代り邪の政正さんために來りしぞ眼前思ひ知らせんと。罵りをめく有様は。フシ恐し。なんどもおろかなり。地色兼定少しも騒ぎ給はず。詞ホホウ文覺の魂とて新しい事承る。法の掟を背くにこそ。一年一度は許されて女人の參る道場故。其當日を今日に取越せとある勅説は。大善根の結縁佛神感應あるべきに。物咎する文覺坊現世におはする其時も。頼朝に頼まれて平家の世をば覆し。又六代に頼まれては二度源氏を亡さんと。謀叛好きな癖あれば魂魄ととも其如く。又何者にか頼まれて叛逆一味の企てと。睨んだ眼は違ふまじ。サア眞直ぐに白狀と。地理正しき一言に。返答はつと行當る暫くしらけ居る所に。後に控へし師國俄にうんとのりかへり。悶絶したる有様にてやがてむつくと起き上り。詞方々知らずや我はこれ。當寺建立の本願人和氣清鷹が靈魂なり。そのかみ仕へし孝謙天皇行跡無道にましまし。罪なく遠流に處せられたる鬱憤今に止む時なし。根を同じうする女人の參詣。許して靈地を穢させし。遺恨は親王汝にあり。地立ち所に慙しめんと。フシ氣色

込うでぞ挑みける。地色千王焦つて飛んで出て進む惡僧五六人。引摺み／＼投げ散しつゝと立ち。詞ヤア兩人のへろへろ怨靈。某を見知ったか。日本無雙のわやく者金平が幽靈。婆の騒動聞くよりはや八萬地獄を脛にかけ。でんぐりかへりして駈付けた。鬼友達と附合ふ故人食ふ術も知つてゐる。地おのれ等動くな片つばし坊主首を引抜いて。鼈料理の生醬油。色しゆつ／＼しゆつと。地云はせんと。ふんちがつたる有様は。フシ閻魔の從弟も斯くやらん。地色僧都是當の違つたる顔青ざめてきよろ／＼と。氣色を直し追從驤天晴れ健氣な若い者。詞手柄次第に何ぼうも首引抜いて遊ばれい。地愚僧は寺に立籠り靈魂鎮めの護摩を焚き。御代は長久親王の磐固を祈り申さんと。挨拶口も跡や先。フシ山上指して逃げ歸る。地色千王可笑しさをたまたまれず。詞ア、蟬海殿手が悪い。俗は熱火を手に拂ふ。僧都是惡事を弟子坊に塗つて／＼塗る坊主。地まめな足元逃げ振りと大手を打ちて笑ひける。地色時夜叉進んで下知をなし物な云はせを打ちひしげと。切先揃へて切つてかゝる。詞ヲ、面白し／＼。歌もみち踏分け鳴く鹿の。ナホス、胴骨肩骨膝頭。藥食ひには重疊と大手を廣げて。三真追ひ廻す。フシ中にも猛き。脱天坊。組みにかゝるを事ともせず目より高く差上げて。詞文覺坊と名乗れども誠はそでんかく上人。地精進看に取らせんと。敵の中へ投げ付くれば。微塵になつて失せにけり。此勢ひに恐れをなし四方へ別れて逃げてげり。地色エ、臆病なる惡僧ばら逃ぐるは科を悔ゆる道。許すは仁愛深き道道の道たる親王の。還御を急げと御車に入るさの月の都の方。輝く威勢は八洲の外。疊込んだる兼定の智慧の明王千王が。武勇は四海を覆ひたる天を。翔りし斑足王。山を劈く龍伯公。それよりも名は高砂の松の操に準へて忠臣の種。と榮えける。

第

二

地孫眞人が三養にも思慮寡きを第一とす。然るに富仁親王は皇統萬機の政。民を養ひ世を惠む。古賢の教文の道夜

盡絶えぬ御工夫に。御心疲れますすにや。盛りの花の顔ばせも。フシ稍襲れさせ給ふ故。地色公卿の面々とり、
 に臥慮を慰め申さんと。絲竹の遊び舞樂の興夜の大殿の添臥に。女御の入内六宮に更衣の袖を並べても。君御心傾か
 ず鶯鶯の褥もいたづらに。病鶯の明暮と。スエテ宸襟穩かならざれば。地智化の老臣是を歡き。三臺五門四座七辨
 各御殿に出仕あり。地色かゝる所へ蟠海僧都心にあらぬ袈裟衣。苛高の數珠仰々しく殊勝つくつて參内あり。兼定公に
 對顔し。互に行幸の下心胸と胸とにありながら。表は慇懃やはらかに。詞遠路の御行駕御連枝の御慈愛深くしま
 す段。千萬感じ入り候。ヲ、されば。親王寶祚長久と日頃に念ずる法力故。清獻文覺兩人の靈魂をだに鎮めし
 の。況や當座の邪氣なんと一祈りにてさまさんと。地はるる參着致したりさは云へ當卦本番の。星の祟が氣遣はし
 と。天文の書を取廣げ算木を並べ忝しく。氣ふ、當年は丑の年。時は十月生は辰にて金性ハ、ア先づ辰は陽にて天子
 の形。丑の年の陽に應じ金性水と相生し十月の陰を自得す。陽有餘の德に位し。地男子は病難の憂なし。女は當月陰の
 運に辰の陽氣を閉づの大病。踏み違へたら危物。世上の噂が偽りか皇子と云ふが實正か。二つの迷ひに蟠海は殆んど
 當惑致せしと。フシ眉を。ひそめておはします。兼定につこと打笑ひ。詞吉左右の占の面先づは安堵仕る。御惱は追
 付け鎮らん。地皆々悦び給へやと共に。壽なし給ふ。僧都顔色せき上げて。ア、とばけまい諍ふまい。詞忝くも易道
 は伏羲氏の畫してより。孔子の天命佛神の。冥慮を照す鏡の面男子には病難なし。地それに違例とあるからは女帝に
 は極りし。大切の儀を僞つて必ず後悔致すなど。かさにつけたるはね袴。フシ腰のさするぞ是非もなき。地兼定怒り
 を押鎮め。詞コハ心得ぬ御咎め。憚りながら占形の御傳授いまだ足らぬ故。總じて易は變易とて即時の機轉が肝要た
 り。八卦の面に現はれぬ御惱は四百四病の外。地戀風といふ御惱み疑はしくば御容體。伺ひしろし召されよと寢殿に
 差寄りて。玉垂半ば卷き給へば。親王現なく心は餘所に空蟬の。霜待つ梢枯れに。寄るべ涙に忍び晉を。スエテ件
 ぶ枕押しやりて。稍起直らせ給ひつゝ。明暮御身を離されぬ繪馬取上げて打詠め。フシあら美しやしはらしや。物言

はず笑はねども。長地其佛は生寫し天皇の身と生れても。叶はぬものは戀なるよな。詞楊貴妃却つて唐帝の思ひ李夫人去つて漢王の情。地それは遙けき別れの道。スエテ是は間近き芦垣の。同じ都の内ながら餘所に許せし下紐の。解けて歸らぬ春の雪。フシ花踏み散す。鳥なれて。妹背語らぬ諸翹。憎やねたしや怨めしと。包むに堪へぬ御歎き。哀れはかなき風情なり。詞ハア一筋に思ふまじ。地色後朝に世を恨み待宵に身をかこち憂きつらい目は戀の科。心長う寢るこそは夢にも契る縁ぞと。衣引被き臥し給へば。フシ御簾さら／＼と下りにけり。地色蟠海案に相違して稍暫し差俯き。王子と云ふには疑ひなし。非道の戀慕に迷ふこそ。我叛逆の元手よと。獨笑して打領き。詞ヤア兼定。加持行力を頼まねども是程輕き病をば。何故療治致されぬ。唐天竺にもあらばこそ都に住める女僧師。今迄油斷致されし心底いかゞと怪しめる。關白嘲笑ひ。イヤ御説とも覺えぬ儀。彼には笹目の千王とて慥な夫ある事は。申さねど御存じ。君にもさすが儘ならぬ。地浮世を忙びての御惱み不義と見ては臣として諫をこそ入るべきに。女を奪ひ勸めよとは理不盡のお指圖と。理を正して述べらるゝ。僧都頻りに打笑ひ。詞定木を踏まへてくどくどと胸を焦すは下々の業。地氣儘に募るが天子の樂しみ。先例を尋ねれば。詞白河の院は源の。仲宗を遠流せしめ。其妻を后に備ふ。祇園女御是なり又。永曆の帝には父天皇の女御になづみ。二代の后に立て給ふ是等さへあるものを。賤しき奴の妻なんと勅説として召されんに。誰を憚る事あらんと。フシ傍若無人云ひ放す。詞兼定も笏取直し。入らざる貴坊先例だて此方より申すべし。往昔唐の太宗は鄭仁基が娘を戀ひ。后に備へ給はんと入内の宣旨給はりしを。魏徵諫めて此女。陸氏に縁を結びしと申上ぐれば忽ちに。宮中を出されし。地是ぞ賢き世の例。よい戒を教へずして惡しきを手本に引かるるは國を亡す御思案かと。云はせも果てず。詞ヤア猶以て愚かなり。日月あつての世界なり。天子あつての政道よ。元を立つるは親王の一命。纔か雪姫一人を無理なりとて勸め得ず。焦れて必死に至りなば仁義はさて置き天下は闇。太子とてもあらざれば差詰め此蟠海を。還俗せよと勸むるとて。翻すべき心と思ふか。勿體なや／＼。地一度通れ

し塵の浮世。望むところ更になし。天津日嗣の絶えんこと。悲しうないか兼定。但し叛逆たくむかと雜言云へば關白も顔色變つて聲を張り。詞すはと云へば手を出す御坊こそ惡心よ。地いや其方が非義者と。フシ爭論次第に相募れば。地親王御枕を上げさせ給ひ暫し／＼と押鎮め。詞四海の誹を憚るは臣下の忠義と云ひながら。地天下を庇ふ蟠海の志こそ嬉しけれ。片時も早く雪姫を禁裡へ召せよと勸説あれば。公卿の面々顔見合せ。フシ呆れて。答ふる者もなし。地色僧都一人したり顔。汝如きの愚痴者と論するは無益なり。衆生濟度は佛の慈悲。無體の戀路取持つは人を助くる行者の願ひ。元より名利を厭はねば拘摸とも太鼓坊主とも。笑はゞ笑へ云はゞ云へ。雪姫住家へ立越え縦へ夫の千王丸。孟賁夏育が勢あるとも。我また不動の縛をあざなひ。四種三密の金剛力にて引立て来るは今の事。心安かれ親王。氣遣ひするな公卿等と形は隨緣眞如の有様。心は修羅の早飛脚焦つて。こそは。三重

狩野雪姫道行

次第弓張る月の入る方や／＼我が隱家と定めん。詞奴も笹目の千王は。親王非禮の機に殉じ。蟠海我が家へ來りしを。打鐙の上追ひ返し。重ねて討手來るを待ち受け。腹掻き破るは易けれども。多年の忠義やみ／＼と。泉下の土に埋んより。身を退きて日月のナホスフシ明けき世を。松のときや。夫婦諸共旅姿心の駒に鞭打たず。足の乗物手の奴。杖と草鞋に案内させ。住みこし都を立別れ。フシ近江路指して出て。行身の有。オクリ様こそ。是非なけれ。名も逢坂の關ならば。追手を防ぐ辻占と女心に喜べば。夫は無念。フシ數々を。跡に見返る。山々の。緑を添へて麗しく。本フシ目馴れし我に餞と。立並びたる心地して。物に觸れても忍ぶ川アノ芦浦に。波風の立たで二人が行末も。猶守山と堅め合ひ。手に手を取りていそ／＼と。袖振る肘振る腰を振る目狭き旅の。物憂さも。戀にはいとど。一中節野洲川に。群立つ千鳥友鶴の。あさる間もなく瀬を早め駒の渡りや徒歩渡り餘所にや人を。ナホスフシ三上山。峯よりお

ろす スエテす櫛葉は。猶萬代の數添ふる。挿頭の幣と吹き落ちて夫の鬢や我が髻を。長地打拂ひ又撫で付けてそゝけを直す鏡山曇なき世を喜びても。いとゞ思ひは果しなき。野路の篠原篠竹の小オクリしんき。しんきのふし込めて汝も憂目を知り顔に續く茂りも長等山。打過ぎ行けば渺々と。向ふに清き月出島。歌堅田浦よりコツチへお舟がお舟が。來るとヤツシツシ。調簾櫺を揃へて押せヤツサ。琵琶の水。海月を見しよオホンしつとん。オホンしつとんナボスフシ空簾の音のよさと。旅の道草。老曾森。小石交りの露霜の。裾に纏はれひたゝゝ。避けて急げばしとしと歩み苦しき足並も。波のうね野やまぐず野の。萩も薄も刈萱もおのれゝが。染模様。露皆脱ぎ替て木枯の。ナホス朽葉の錦装へる花の縁と見返れば。玉のお山の村時雨さつと降り來る一しきり。つれなき松もおのづから。馴れてや近き フシ床の山。岩がね枕苔簾。臥す猪鹿の音諸共に色を込めたる優景色影恥かしや名取川。契は深き中々に心の憂さと。較ぶれば。猶も隔つる。二面見せばやこの手柏原泊も旅の習ひとて。二人が中に面白い夢も見果てず醒井の。スエテ流れも清き道のべに暫く。語らひ フシ休みける。

地かゝる所に師國時夜叉大勢引具し駈來り。詞ヤア天罰知らずの下郎め。刺を承る僧都に向つて惡言吐き。地打擲したるあぶれ者いづく迄か通すべき。命惜くば女を渡せさないと首が逐電せん。何と何とと罵つたり。詞千王からからと笑ひ。性懲もない腕ずんばいおのらが主人の巢入が。無體の頼たゝきし故拊碎かんとしたれども。出家の身を憚つて土足を上げて疥癬元。地そつと撫でたるぶんの事慮外もせぬ落度もない心ありての我が出國送つた賃に片端。握拳が所望かと捲り上げたる腕毛は。綱が鎖を掴んだる フシ茨木童子も斯くやらん。さしもの同勢怖れなし互に譲りゝ合ひ。進み兼ねてぞ守りある。時に遙の跡よりも兩人止れと聲をかけ。雪姫が父臍手織部逸散に馳せ來り。詞ヤア粗忽あるな師國。貴殿は僧都の仰を請け私の遺恨なり。我は天子の勅命にて是迄追手に向うたり。若し此方の手に餘らば其時加勢を頼むべし。先づそれ迄は退いて見物あれと押隔て。やれ狼狽へたり夫婦の者。名に負ふ笹目の千王

とて武道を磨く身を持ちて。地堪忍を辨へず漫に都を立退くは。女が惜いか道手がこはいか。心底いかにと尋ねける。詞千王丸聲荒らげ。討手といひ剩へ舅の口から不挨拶。女の五疋三疋に袈打たるゝ男でない。天子に戀慕せらるゝは天晴果報の雪姫。參れと言へども頭を振り暇を呉るれば死なうとほざく。地色勅諭背けば討手の沙汰刃向ふ時は朝敵同然。天子に非義の名も立てず夫婦が節義も立てたさに。いづくになりと影隠し世上の鳴を靜むるなり。聲の舅の遠慮はない入らざる止立致されなば。椽麩棒を掉られんと。フシ切刃を廻し怒りける。織部騒げる氣色もなく。詞汝が申すは若氣の思案。普天の下卒土の濱落着く處皆王土。君に背いて天地の内いづくに足を止むべき。粗忽の至りと言はせも果てず。ハテ日本に住まれずば。地足に任せて唐高麗鬼ヶ島へもつつ走り。廻一つて働いても夫婦が口は養ふとえせ笑ふ。フシてぞ居たりける。織部いらつて聲張上げ。詞事可笑しき言分三千世界を乗越して忒利天に至るとも。朝敵不義の兩人を圍ふ者のあるべきか。覺悟極めて立歸れ。イヤ朝敵とは謀叛の輩。無道の君を見限つて國を立退く例はないか。ヤレ勿體なや親王を假にも悪しく言ひ散す。舌は八つに裂けぬべし心を鎮めてよく聞け。國の主の御身として。御儀になる程雪姫を戀ひ慕はせ給へども。地道ならぬ義を辨へて押して召さるゝ宣旨もなく。關白其外公卿達それと色には悟れども。勸めんといふ臣下もなく君臣共に素直なる。恵は夫婦が身に取りて冥加に餘る事ならずや。偶然るに蟠海謂れなく取持ち顔に立越えて。汝に對して無體の所望。邪とも狼藉とも。我と我との仲ならば存分に致す筈。されども僧都何人ぞ先帝の一の御子。地色君御連枝の御身體下衆の土足に穢すといひ。勸を背いて立退くは朝敵にあらざるか。サア返答と詰掛くる。詞千王丸ぎよつとして。ハア南無三寶しなしたり。地色生れ付いたる一轍にて。思はず知らず某は朝敵の名を取つたるか。エ、後悔や悲しやと鬼を欺く目の内に。涙はらゝ男泣き大地にどうど身を投げて足擦したるばかりなり。親と夫の靜に。心も消ゆる雪姫は。互の胸を推量り。我身の上を思ひやりかつばと伏して。泣き叫ぶ。織部も共に涙ぐみ。ヲ、ことわりなり。フシ道理なり。君も哀れと思召し關

白公も兎や角と。御思案を廻らされ今改めの勅説あり。歎を止め承れ。詞綸言の旨別ならず。親王わりなき好色を晴け難なき御餘り古へ美人の譽ある小野の小町が佛を寫させて見るならば色品ともに雪姫が。地姿繪よりは勝るべし増す花あらば今迄の。戀は忘るゝものぞとて兼定是を承り。道の工に云付けて繪に書き又は木に刻み。數多觀覽致せども御心に止まらず。詞弘法大師の遊ばせし玉造といふ文に。小町が盛の顔ばせより老の波寄る腰付迄。少しも變らず書き記し寶藏に籠め給ふと聞く。地雪姫筆に妙なる上夫を救ふ誠をば。佛神に祈りても高野の御藏に納りし。正しき小町が姿繪に少しも變らず寫すべし。日限十日が其間人質として千王丸。獄屋に繋ぎ置き給ふ。事無う繪圖だに成就せば。親王戀慕を思し切り千王丸も御免あり。夫婦に下し給はるべし書現す事叶はずば。夫も罪し其方を召仕へとある勅説なり。汝も世に知る繪の名人仕果せてあるならば。夫婦が仲も變りなく第一には親王の。惡名出さぬ無一の忠義。急いで勅答申すべし。フシかにと勧めける。雪姫はつくぐと聞くに思ひの結ばれし。糸繰り出す涙の露貫き止めぬ顔を上げ。思召しても御覽あれ名高き畫工の人々さへ。小町が顔に劣らずと寫し得難きあらましを。拙き筆にかなれば十日が内はさて置いて。我黒髪は白妙の老になる迄案じて。見ぬ佛を中々に。何とて置き出すべき。と云うて背かば忽ちに夫は殺され此身をば。宮女の數に召されんとは無體至極の勅。十善天子は下々を恵み給ふと聞くものを。此難題は胸慾や。頼もしげなき世の中としやくくり。上げてぞ泣き居たる。見るに憂目をますらをが彌猛心の千王も。齒を喰ひしがり眼を張り。ハア力なき次第かな。樊噲項羽と戦ふとも勇氣弛まぬ勢ひも。綸言といふ兵にはほど矢先を折られたり。無念にあらう雪姫貞節は身に逼る。其上及ばぬ難題も我に連添ふ故なりと。思へば不便の女房と打蕪れたる有様は。猛きに餘り哀れなり。詞織部言葉を正しくし未練なり千王丸。雪姫も又胸甲斐ない。地知らずや松浦小夜姫が夫を慕うて石となり。又藤原の佐國は花を愛して蝶と化し惠心僧都是肉身の胸に蓮華を生ぜしも。一心の念願力知らぬ天竺見ぬ唐。工夫の上に歴然たり是を悟つて末代迄。譽を残す氣はないか。何ととたゝ

み掛け理せめて言ひ立つる。雪姫はつと打顔き敷きに心奪はれて。清き誠を忘れたり世界の人の子を生むにも。初めの程は其形定かに何と定めねども。辛抱よりして悉く續き備はる血筋の繪本。此理を種として小町に變らぬ美人をば。寫し出さてあるべきか氣遣ひあるな我夫と。今迄素む面差は。やがて笑顔に返り花。直ぐに小町が姿繪と。フシ思ふばかりに美しき。千王大きに悦んでヲ、出來したり頼もししお主が筆の働きて朝敵の名は残りなく。繪の具の下に立隠れ忠義の道に歸らんと。勇み進んで立上れば師國時夜叉聲々に。詞コレ召人めに繩を打て。地逃すなやると下知を受け取つた〜と駈寄つたり。詞千王眼に角を立て。コリヤ蛆蟲とも何をする。坊主が討手は恐くない。勅諭故に立歸れば逃げも走りもせぬ男。窮屈な目は身が嫌ひだ。へろ〜繩の千筋より千王が一言は。地色八重の鎖も同然跡へさがつて供せいと反打掛けてのつかのかイザ〜お先へ昇殿。女房どもも来い〜と手を引き袖引き引き連る。一挺の弓二挺掛墨と硯の戀仲は。眞實眞書極彩色。織部が情の本繪より。唐繪に稀な日の本の昔に照らす玉造。小町が姿寫繪と普く。世上に廣まれり。

第 三

地水は人に近うして而も人を溺らせ。徳は馴れ易うして而も親み難しとかや。元より無道の蟬海僧都天位を輕しめ逆威を振ひ西蟬峨の別院を内裏造に建て並べ。身の天罰を願ぬ冠の下の鬘髻。法衣を解いて袈裟の袂けやけく玉宸に着き。自ら天子と稱すれば。従ふ所の惡僧迄。假髮頭とり〜に。おのれと登り官加階。護摩堂守の關白職。お札配りの左大臣。地奉加勸めの權中將。旦那あしらひ頭の辨。お福所の尙侍。常番守は衛士の役。伴の御奴朝淨め。鐘撞き坊が御垣守。其役々を請取りて。木地が丸さに冠を。滑らかすやら束帶の。裾を踏まへて轉ぶやら。笏て願播磨。船に酔うたる風情にて。フシ騒々しくぞ。列座する。地色蟬海緩々と空嘯き。げに幸ひは招くに來る。薨々蕩々たる

禁裡いんりの體粧たいそう。地追ぢお付け大聖成就だいせいじゆうを待ち設けたる前表と。貪慾どんよく先立つ廣言くわげんは、フシをこがましくも憎てなり。地色ぢしき時夜
叉席しやくを抽ひんでて。詞君しきみには何時迄いづれまでうか／＼と時節ときせつを見合せ御油斷ごあぶある。衆徒しゆと野武士等やぶしを始とし數千騎しうせんき擧あつて合戰がくせんを。今
や今やと待つ所。急いそいで京都へ御出陣ごしゆじん然るべうとぞ勸めける。ホ、ウそれこそ彌猛やびやうに思へども。小氣味せうき悪きは千王丸
彼奴か奴を殺さんばつかりに。かの高雄かうたけでの仕組より段々枕まくらを削り續け。どうやら斯うやら只今ただいまで牢獄らうよくの身となしたれど
も。地未ぢみだ命のある内にすはと言はゞ出しやばつて。又慘あはい目に出遇はんかと思ひ出すさへぞつとする。先づ／＼彼
めを殺すの計略けいりやく仕上しあを見よと云ふ所へ。地色ぢしき師國しこくはこと／＼しき競きひも顔に乗物を。桐油とうあぶにしたみ細引こしひ掛け下部かぶに昇
かせ殿中の。小暗せうあんき處におろし据ゑ。詞御しご大切たいせつの召めの者首尾しゆびよく伴ひ候と。地聞ぢきくより蟠海たんかい。詞ヲ、大儀たいぎ々々。地早
早是へ引出せ承ると立ちかゝり。鴛いの縛め切りほどき龍りゆうり出でよと戸を叩けば。フシあいと答へて立出る。男の年
三十の上は二三度水淺みづあ黄わう。木綿きわた裕ゆうのしよぼからげ彥惣頭ひこさうづ巾きんの髻てんし先に。早や職人しやくじんと知られける。邊たを見廻しぎよつとし
て。あなたへ走りこなたへ行き。立騒たちさわぎ横手よこてを打ち。譚たん面めん妖ような處へ來た。わけも云はずに道中みちちゆうで乗物へ拾ひ込み。は
つと思つた其後は闇路あんろを辿ると覺えしが。悲しやおれは死んだげな。あれ／＼あそこに閻魔えんま様御慈悲ごひでござる十王
様。地婆婆ぢばばへ歸して下さりませ。老いたる母や女房がわしが手一つまぶるとは。言はずと見る目喚めがく鼻のお取合せも
あらう筈。參らで叶はぬ道ならば衣裳いさうの仕覺しげもあるべきに。頭巾かぶとを着たる罪人は。ためし稀なる我身われみやと。フシ震ひ
佗わぶるぞ可笑しけれ。地色ぢしき師國しこくも打笑うてわらひ。詞威しゐ程合點ちやうがてんの行かぬ筈。忝はづかしくも爰こゝは禁中。あれに御座るは富仁親王。汝を
御殿へ召さるゝ事世間の聞えを憚おそる故。斯く計ひて連來れり。少しも恐るゝ事はない。宣旨せんしの趣とつくりと吞込くみこませ
いと云ひければ。ハア扱はは爰こゝが内裏ないり様。地結構ぢけうなやら恐おそいやら未だ性根しやうこんは落着かねど。お内裏様のお手づから煎あじ茶
を吞むなどとは。凡慮ぼんりょの外ほかの仕合せ。とても事の十粒じゅうりやく程供御くぐでも浮し給はれと。フシ頭巾を取つて畏る。地色ぢしき蟠海
遙はるに聲をかけ。詞ム、人形作にんぎやうの名人。左の基五郎とは汝なよな。最前さいぜんよりも様々と痴ちをつくすは作物さくぶつ。以前いぜんは由よしある武

士の由。魂を見届けて大切の所望あり。一通りを語るべし。世の噂にも聞きつらん。朕雪姫が姿繪に戀慕の思ひ遣頼なく。后に立てんと計れども千王といふ夫が邪魔。彼奴を害せん其爲に。難題を言掛けしは。高野大師の御筆に小野の小町が姿繪を。末世の鑑に残されしは寶藏に納りて。天下に一人も見知らぬ圖。それに變らず寫すべし十日を限りて出來ずんば。雪姫を召上げ千王を誅せんと。のつびきさせぬ魂膽よも書くべきとは思はねども。地一器量ある女續師。自然に寫し得る時は我戀叶はぬのみならず。天下の人の物笑ひ細工に於いては汝また。世に知られたる者なれば七日が内に先達つて件を刻み出し。雪姫に鼻あかせば朕が望みも叶ふと云ひ。汝も細工の名を擧ぐる褒美は望みに任せんと。フシ誠しやかに語らへば。地色甚五郎思はずも二度びつくりの身の難儀。生れ付いたる正直者なかく不義には傾かじ。何卒此場を言逃れ首尾よう宿に歸らんと。騒げる胸を押鎮め。詞職人通を公へ召出さるゝ有難さ。冥加の程も辨へず勅諭違背致す段。畏れ多く候へども。甚五郎めが細工の儀は師匠も取らず教へもなし。地美人に三十二相とは音には聞けど目には見ず。滅法界の當仕舞子供の泣くを紛らはす。慰む業に候へば。權者の筆の意氣込を。千日千夜寫すとも叶ふべき儀にあらざれば。詞御赦免願ひ候と謹んで平伏す。蟠海大きに忿をなし。ヤア表裏ある抜け口。京童に至る迄細工は左の甚五郎。繪師には狩野の雪姫と互角に立ちし名の譽。彼めは繪圖を請合に。おのれは辭退致す事朕が詞を侮るのか。雪姫夫婦を疵ふのか。所存を聞かんと迫りつくる。甚五郎頭を上げ。御不審は御尤も。小町が誠の顔形我が知らねば雪姫も。見ぬ事ながら畫かんと領掌せしは貞女の道。十日を限る夫の命金輪際迄助けんと。思ひ込んだる一念こそ天理に通ずる工夫の柱。地是を基に取付けば小町はおろか目に見えぬ。金命鳥でも寫すべし。甚五郎が身に於いては工夫の柱候はず。其上一人の老いたる母三日以前に何者か。勾引されて行方なく洛中洛外夜盡と。足を空に尋ねれば魂は早や右頂天。鉤取る手も覺えずと聞くより蟠海聲を上げ。ヲ、面白いく。地急いで召人引出せ承ると一間より。頭の雪も溶けやらぬ綱目より猶見る目憂き。オクリ老のへ足取。フシ弱々。とや

れ甚五郎母人か是は／＼と打驚き走り寄らんとする所を。師國其外惡黨ども眞中に駆け塞がり。詞推參至極の下郎め。大事の宣旨を蒙りて勅答もせずのさ／＼と。召人に立寄らば目に物見せんと極附くる。甚五郎氣色を變へ。こは心得ぬ人々かな。老いたる母にいか程の罪科ありて其如く。縛り絡げて置き給ふ。君邪にましまさば諫を云ふべき方々が。共々跳り狂はるゝは君臣共に世は既に。地道なき國となりしよな。あはれ昔の武士ならば天子であらうがお公卿でも。片端より斬散らし母の供して歸らうに。町人の身の悲しさは小刀一本貯へず。右の腕は叶はねば心ばかりの羽拔鳥。無念の我や口惜しと。慮外も身をも顧ず。フシ罵りわめくぞ道理なる。地色蟠海はしたり顔。詞ホ、嗚あらん／＼。兼々親に孝なる由先だつて召取り置く。是を汝が工夫の柱。なんと違背はなるまいが。返答いかにと迫り付けられ。地甚五郎一言の答も出ず胸幅り。道を歪めぬ墨曲尺も兎や角狂ふ有様に。かしこへどうど居坐つて。スエテ身悶へ。したるばかりなり。母も涙にくれながら。ヲ、道理やなことわりや。地因幡藥師へ參詣し。その歸るさを大勢に取圍まれて今日三日。憂目に遇へる此身より夫婦の人が泣き焦れ。尋ね惑はんいとしさに命の内に今一度。顔をも見せて死に度いと願ひし神の利生にて。思はぬ對面遂けたれば。フシ此世に心は残らぬぞや。地色只今聞けば自らが召し取られしは其方を。頼まん爲の下心世に大切の詔。輕々しくも請合つて折角作り刻んでも。お氣に合はねば身の恥辱。お役に立てば雪姫が貞女の道を妨げん。人の歎を身につみて未練を出すな甚五郎。親子の因夫婦の義理いづれも重き事ながら。他人の誹が恥しい若木の末を枯らすなよ。はや流れ行く老波の母をいとふな庇ふなど。言葉を盡くし氣を配り。フシしやくり。上げてぞ泣き居たる。地色途方涙の甚五郎やう／＼と顔振り上げ。今に始めぬ親の慈悲。憂目の中におはしても。子を思うての御教訓。あら勿體なや忝なや。左程恩愛深き程猶天罰が恐しい。詞いかに貧苦を致せばとて。夫婦が代る／＼にもお供に添うて歩きなば。地斯様な事はあるまいと女房どもがぐど／＼と。悔みては泣き云うては泣き。泣くを見兼ねて相借家。お町衆迄手分してわしは今日稻荷山。深草邊を尋ねしにあの侍に

出逢へばこそ。存じも寄らぬ御對面いまだ盡さざる親子の縁。差當つたる御難儀を救ふより外世の中に。義理も道理も無益ぞと。思案極めし顔色に母はいよ／＼氣をせいて。詞ヤレ狼狽者卑怯者。おぬし今こそ町人なれ。先祖の武士の名を汚すは。地不孝の上の不孝ぞと。母は子故に身を捨つれば子は又母を痛りて。誠にせまる憂き涙。フシ心の玉を貰けり。地色蟠海焦つて大音上げ。詞よしなき憂に事延引母が生死はおのれ次第。孝を立つるか義を守るか。ぬかせ／＼とのふめけば。地思ひ詰めたる甚五郎。詞ハア畏り奉る。常々親を養ふも此左の手只一つ。地色今又命を助くるも此手に得たる細工の道。孝行のため君のため念力を以て七日が内。刻み申さて有るべきかと。フシさも潔く云ひ放す。詞イヤ／＼何とも呑込まぬ。當座の難を遁れんとは面魂に顯れたり。偽りならぬ誓を立て。コハ曲もなき御詞。甚五郎めも其以前武士商賈をせし時は不義非道には傾かねど今町人となつたれば。仁義禮智の四つ賢は拂ひ仕舞うてさつぱりと。地新銀賣の細工人小刀冥利此方に。少しも偽り候はぬが疑はしきは御方々。詞内裡々々と宣へども來りし道を覚えねば。重ねて母を受取りに。地いづくを指して參るべき。證據をたべと望みける。地色蟠海暫く思案して。地裝束一重召し出し下々なれども噂にも。天子の服は聞き及ばん。詞是を後日の證にせよ。今日より七日に相當らば勅使を母に相添へて。地汝が宿に送らんとさもありさうに欺罔れば。甚五郎立寄りて見れば哀龍天子の御衣。ハットばかりに押戴き玉の御階の案内も。知らぬ下郎の冥加なく兎角疑ひかけまくも。忝しや勅詔を何しに背き申さんと。巧にふはと乗物を。包む桐油の神ならぬ身の行方こそ。三果果なけれ。返せや／＼お祖母をかやせ。甚五郎をかやせ。フシかやせ／＼の。地色太鼓鉦。尋ぬる妻の心さへ。闇に磔の當所なき行方を照す小提灯。骨惜みなき相借家頼めばほんの杖柱棒になる迄足限り歩けどあるか白雪の。逢はて今宵も明方に。フシ打連れ我家に歸りけり。地色涙ながらに女房はマア／＼皆様忝ない。夜の明るる迄う／＼と駈廻つての御懇切。其甲斐もなき悲しさと。スエテ袂絞れば聲々に。詞ヲ、道理々々。祖母様といひ甚五郎。地二人ながら見えぬとは並大抵では泣き足るまい。こ

ちとに禮は及ばぬ事。懇仲はこんな時。とても尋ねに出るからは一人も二人も同じ事。随分探し歩くのに逢はぬほどこへ擱んで往た。大江山の鬼神でもお祖母に無心は云はぬ筈。年寄來いといふ程に鳩の峰へも飛ばれたる。甚五郎はてつきりと源五郎狐へ入婿。大和の方を尋ねたら。フシ知れるであらうと笑ひける。地色女房は餘所事の耳へ入らねど愛想げに。お宿の店の開く迄は皆寄つてたばこでも。茶でも參つて下さんせ。詞サレバノ。亭主の留守に大勢の頭敷を押込んでお茶争ふてはなけれども。地志ちや參らうと皆門口に來かゝりしが。ヤア何やらあるぞ提灯と。立寄り見れば是はさて絡み付けた捨乗物。合點が行かぬと詞の下。詞こりや女房ども。湯でも水でも一口と。地隠は紛はぬ甚五郎。ヤレ戻つたはそれ〳〵と手んに細引ひつたり。桐油捲ればすつと出る冠裝束きらめきて。見た事もない身の有様女房初め皆の者。ためつすがめつ打ちまもり。甚五郎には極つた形が一圓吞込まぬ。様子はどうかや昨夜から。フシどこに居たぞと咎むれば。地色さあらぬ顔にえせ笑ひ。詞ナントきつか〳〵。羨しうてたまるまい。ちつと吹聴仕ろ。さる所の神主に祭道具の貨貨。壹貫五百ぬぐさになり何時でも留守を使ふ故。昨日は時分考へて案内なしに臺所へ。ずつと這入れば幸ひと夫婦酒事最中の。眞中へのし上り。人には損をけなながら。こりや御榮耀でござるのと。憎體口に當付けられ。地そこらが流石長袖ぢや。赤面してそつと立ち簞笥の中から此裝束。前に置いて手をつかへ。詞銀子と云うては當分ない代りに是をと聞くと早や。詞變改のない内に取つて着して思ふやう。先づ此形で二三日店先へ出て雛の看板。それから跡を切り碎けば芥子人形が六七千。十層倍の利徳ぞと飛付く心をじつと鎖め弛をくれぬねだり聲。詞神職の身を以て尾籠至極のなされ方。神は非禮を受け給はずなりませぬなりませぬ。地ならぬ〳〵と一越調そこら四五軒鳴響けば。筋向の醫者坊が。薬研片手に走つて來て。どうぞ了簡遊はせと詫げればいとゞ日垂れ見て。こなたの知つた事ぢやない醫者坊叶はぬ退いて居や。いかにも構はぬ筈なれども抜ひかゝつて身ども亦。す〳〵とは歸られぬ是非に及ばぬ古けれど。乗物一挺はずみましよそれで足らずば桐油細引。平にと云ふを機にし

て近頃無念に存すれども。こなたに免じて堪忍と云ふより早く三枚肩。飛ぶが如くに立歸り。フシ斯くの通りと紛らかす。地色皆々横手を丁と打ち案じたとは格別。銀儲して送られて。身上は吹付くる左扇の甚五郎。祖母様は御輿で戻りりと。オクリざはめきへてこそ歸りけれ。地色夫婦も今は背戸門を開けてもあけぬ胸の内。装束ながら甚五郎物をも言はず煙草盆。思ひ草とや手に觸るゝ煙管より猶廻り氣な。女房膝を突き動かし。詞これ爰な野良間。何時の頃から目を抜いて内裏上臈とくさり合ひ。公家出立ての夜泊。地いかいお手柄さるにても。母御様の此頃中行方知れぬは忘れてか。わしが心の悲しさをいかばかりとか思うてぞ。姑御にも此方にもお氣に違つた事もなう。陸じう暮せしに行方の知れぬは何程の。恨み憎みのある故と身を疑へば世間には。惘然者と謳はれん生きて詮なき身の上と。わしや覺悟して。居ますぞや。それとは違ひ結構なぞべくとした形をして。相借家の人々へも苦勞の禮はそこゝに。嘘八百は何事ぞエ、惘然や怨めしと。スエテたくり掛けてぞ。かこちける。地色甚五郎小聲になり思ひがけなかり形。心得難く思ふ筈我身ながら我かとも。辨へ難き身の難儀。詞藤の森の邊にて人大勢に立圍まれ。禁中へ召されしに母人は早やあの方に。人質に縛められ仔細は斯様くにて。詮ずる所見ず知らぬ小町が像を七日が内。仕果すれば其通りさもなき時は親と子の。長き別れとなる事を。地そも何とせん女房と思案顔なる目の中に。スエテ忍び涙を浮べける。地色女房聞いて打驚きさうとも知らてつかくと。フシ今の慮外は免してたべ。扱おいとしや姑御。老木の肌へ荒けなき縄目に憂きを見給ふと。傳へ聞くさへ堪へ難き。詞いまだ目に見ぬ鳥類さへ作り出せる名人の。細工を得たる御身にてなど腑甲斐なく見え給ふ。地片時も早くお命を助くる様子遊ばせと。勧め立つれば甚五郎。誠にそれよ能う云うた。油断をするは不孝ぞと冠装束脱ぎ置きて。本地の頭の荒ごなし左細工に工夫の妙。先づ口開に目は二つ鼻筋高う耳の穴。なしとは人の偽か。淨瑠璃本の小町でも大方格は知れてある。サア女房ども美しいか。フシ評判せいと差出すを。地色見るよりふつと笑ひ出し。詞どこにか小町が目を剝いて澁面作つて居やすまい。

おぬしが目にもさう見ゆるか。地どりや此度は念入れて白木にあてる青木賊。磨かれ出づる玉造。小町が姿生寫し。ぞつとする程よかろがな。詞ヲ、ぞつとする。矢張初めの澁面顔。餘り立派で嘘張い。こなたの細工何時からかどの人形も此顔癖。地色よう氣を付けて見給へと詞に付きて打守り。初めて刻む其時の。一念が晴れぬ故側から指南頼むぞと。互に心合せ砥に。小刀の刃もつくく。と。切れると繋ぐ親子の縁。オクリ案じへ煩ふばかりなり。フシ物憂き旅も。一入に重きが上の稚子を背中に。ちつと笈摺や。胸に木札の巡禮歌。スエテ女の聲のしなやかに。巡禮歌補陀落や岸打つ。波は三熊野の。那智のお山に。響く瀧津瀬通らしやれ。歌父母の恵みも。深き。詞これくナウ。こちらに大事の魂膽事。地氣が散れば邪魔になる通つて下され通らしやれ。歌岩を立て水を。湛へて壺坂の。詞ヤイ物貰ひ。斷り云ふを聞かぬ顔賣物見世にへちまふは袂の下の谷汲へ人形を納めよといふ事か。地うろついて居りや巡禮に棒喰はすと腹立つる。詞ハア御尤もさりながら。報謝の望で先から立ち休らふには候はず。私どもは遠國者思ふ願ひの候て。西國の志し何とも難儀は此若が。道中から蟲おこり泣き憫むを謙し兼ね。地氣慰に人形が求めたさと聞くより早や。手鑿返す商ひ口。詞ム、結構な巡禮様。若子は奇麗な生れつき。お顔なら手足なにかい上手が作つた物。地色女房どもと談合してお氣に入つたを召しませ。醫者になりたか胴人形飛脚が好きなら飛び人形。南京人形武者人形。フシお望み次第と言ひ立つる。地巡禮が子を下し。詞コレ金平か西行か。地どれかこれかと宛てがへど其方へ目もやらず。今作り居る人形の顔をつれく守り居て。あれをく指差せば甚五郎可笑しが。詞世智賢い幼い身がきどりし人形より。地荒木作りが欲しいとは錢安いのを御賞翫。商ひはしたけれど大切な詠物。フシならぬであんすと欺けば。地色巡禮も恥かしげに。いかさま此子も不物好。此内で見てどれなりと買やと云へども聞入れず。詞イヤあれが父様の顔によう似た懐かしい。地買うてくと泣叫ぶ。母は聞くさへ慕はしく心を付けて差覗けば。げにも夫に生寫し縦から詠め横から見て。そよろに頭を抱き取り我子引寄せ涙にくれ。ヲ、賢い子やよう見知つた。

日頃に可愛がられたる恩愛によりと、様の。逢ひにござつた對面しや。アラ懐かしの我夫と。フシ抱き。付いてぞ泣き居たる。地色夫婦は呆れきよろ／＼とためらひしが立寄つて。詞ナウ巡禮。忝くも此人形は天子のお手に觸れらるる。地涙に穢すは何事ともぎ放す手をしつかと取り。アラ心なの都人。夫の形見と見るからに共に此身も朽つるとも。なか／＼頭は渡さじと奪取りて走り退き。撫てつ摩つつ抱きかゝへ。懷へ入れ膝に置き。袂の内に押隠し身を震はせし氣息ざしは。海士の浮繩引上げて。フシ玉取り得たる如くなり。地色女房は立寄りて。詞殿御を慕ふ御歎き穗に現はれて痛はしや。此人形は手前にも命に代へる念願にて。夫が刻みかけたれども仔細に依つて自らが。貰うてなりとも參らせん様子ありげな御有様。地心置かずとお咄しあれ數ならねども我々が。一遍の回向の種功德ともなるべしと。スエテ世に泌み／＼と尋ねれば。地色旅の女は起き直り嬉しの今の詞やな。女心のはかなくも。切なる愁を包み兼ね。取亂したる身の上を語り申さん聞いてたべ。詞我が生國は肥後の熊本。夫は度會源五とて。關白公に仕へしが不慮の事にて浪人し。伯母を便に國許へ下り給ふを幸ひに。從兄弟同志の夫婦となり八九年添ふ内に。子といふ者は一人。かねがね源五心底に古主へ歸參の望みにて。此子を我に預け置き三年以前の春よりも。京都に上りゐられしが。六月廿二日の夜祇園林のほとりにて。闇討に遇はれし由。地傳へ聞いたる其時の。口惜しさ悲しさを推し量りても知らし召せ。生死無常と云ひながら病み煩ひにもある事か。男盛をむざ／＼と旅の空なる露と消え。詞此子はやうやう其時六つ。後立にも助太刀にも。我身の外に知るべくもなくましてや顔も名も知らぬ敵を狙ふは。もろこしの吉野の山に入る人を。地尋ぬるよりも果なしと思ひながらも念力と。佛の誓ひを頼みにて形は斯様に出て立つとも。心は矢張り煩惱の絆も解けず寢れば夢。歩けど思ひ忘れぬ。夫の最期は三十八。目の張眉のかゝりより。面長にきつとして。只其儘の顔形斯く迄似れば似るものか。正しくは是は觀音の。御手を貸して御亭主の作り給ふと思ふから。暫しも肌は離されず。買はせてたべとばかりにて。フシ聲を。ばかりに泣き口説く。地色同じ涙に女房もげに定めなき世

の中は。いつ何時か身の上にかゝる憂目のあるべきと。フシ思ひやるさへあぢきなや。地色夫婦連添ふ仲にさへ女はいとゞ氣の狭く。世間を恥ちて物事を案じて暮すものなるを。殊更殿御に別れての旅は物かは大切な。敵に憂身襲さるゝ姿といひ。心といひ世界の女の鑑ぞと。フシ思ひ入つてぞ感じける。地色甚五郎は默然と始終を聞いて居たりしが。頻に催す落涙を押拭ひく。又類なき志。承るも人形故亡き世の人に似たるこそ幸ひ。何かは惜み申すべき頭ばかりも見苦しき。それく云ひければ女房も嬉しげに。よくこそ心付けられしそこらはわしが細工ぞと胴串衣裳襖辻のあふ瀬に返る其人と。梅華皮取りて差さすれば。詞ア、イヤく。假初ならぬ武士の姿。地長持にある本身の小。暫くの中取つて来い。アイと答へて一間に入り。オクリやがてへ二腰。フシ持ち出づる。地色甚五郎取上げ人形に横たへさせ。旅の女中御覽あれ。詞此姿ではどうぢやく親子を見るよりつつと寄り。地とゞ様物を云はしやれと又泣き出せば母親は。氣も魂も消えて行く。煙の後も面差は生けるが如くありながら。など詞を掛け給はぬ。せめては妻か我子かと。たつた一言聞かせてと天に。あこがれ地に伏して又歎き添ふ氣色なり。詞甚五郎聲荒く。歎きに性根暗まされ未練なる女かな。大小が武士の魂其二腰より物を云ふとつくりと念入れて對面あれと辱められ。地よく見れば鐙は木瓜青皮の縁。目貫は金の狂ひ獅子不思議や夫の差物に。似たりや似たり花菖蒲菖蒲作りの梅華皮鞆。此二腰は何として此方の手には入りたるぞ。詞ヲ、問ふ迄もなしお主が夫。度會源五を討つたる敵。昔は勝山彦次郎サア首討てと。地聞くより早や。扱は夫の敵かと。子を引抱へ走り退き杖に仕込みし刀を差し。氣色凛々しく立寄れば。甚五郎妻も人形に差させし刀追取つて。夫を圍うて立つたるは。フシ危くも亦健氣なり。詞甚五郎聲をかけア、せくまいく覺悟の前。地浮世に報といふものはあるかないかと疑ひしに。我身にひつしと知られたる。懺悔を兩人よつく聞け。鼠竊して猫を噛み。人貧しうして盗みすと。云ひしは手前の身の上。親の知行を棒に振り母と女房引連れて。花の都は住吉と此所に借宅し。晝夜渡世を稼ぐ内因果は老母大病受け。何れの醫者の配劑も人參目五分七分づつ。刀

脇差諸色迄賣代なしても續かばこそ。一人の親を見殺すかと悲しい時の神たゝき。佛もせぶる思案にて清水へ詣でしに。調八坂の茶屋より呼掛くるは正しく度會源五が聲。同じ浪人仲間にて懇意に語る仲なるに。地心浮かねど立寄れば。家内の宿女に取廻され。借上らしう紙入より四五十兩の金子を出し。湯水の如く蒔き散らす。扱は歸參が叶うたか珍重の儀と云ひければ。調いやゝ是には仔細あり話は追つてと言ひ残す。地ア、よい物を持つてをる十兩貸してくれたらば。母の命を助くるにと。金に惚れたるなずみよりふつと付いたる無分別。所詮殺して取りたりとも孝行よりの悪心は。天道見許し給はんと勝手づくなる了簡して。ともゝ飲んづ歌うつに夏の夜早く更け行けば。深々たる鐘の音。一つ二つと指を折る數も積つて丑三頃。いざ歸らんと打連立ち眞葛原の跡先に人通りなき間を見合せ拔打ちにちやうど斬る。南無三寶と振返るを疊掛けて斬付くれば。刀持つ手にしつかと喰ひ付き振れど振ちれど放さぬを。漸うとして踏倒し止を差して立歸り。金子の蔭にて早速に母の病氣は治りしが。喰付かれたる右の腕。次第に痺れ叶はねども。調左で細工の妙を得て異名を左の甚五郎と。日本國へ廣まる故。身上不足な事もなく。地世を安樂に暮すに就け不便な事を致せしと。一念思ふ其日より。最期の顔が向ふに立ち。お山作るも源五に似る。若衆刻めど源五に似る。あら妻じやと思へども母にも妻にも隠せしが。調今月今日兩人が爰に來るを待受けて。我心命を果すやな。誠に自業自得果と。己れを觀ずる覺悟の體。フシゆゝしくも。又優しけれ。地色親子は一度に聲をかけ。調其方に討たれたる。度會源五が妻にまさご同じく一子徳太郎。サア立上れと駈寄るを。地女房あはて押隔て。大事の敵を目の前に。何とて見許し給ふべき。調さは云へ義理と思あれば討たれぬ品もある事ぞや。地行方も知らぬ旅人が夫の顔に似たる。立寄り給ふは人形の恩。これ正直の人情にも。フシ義理とは誰も申すぞや。地色様子を問ひしは我身の恩。敵と名乗るは夫の義理。恩と義理ある身の上に。調君より難題七日が内に。小町の像作り出さぬものならば。地母が命を召されんとて内裏に止め置き給ふ。爰の所を聞き届け。僅七日が其間。命を預け給はれと。フシ手を合は。せてぞ。

泣き口説く。地色まさごは急いで身を震はし御道理なりさりながら。我身になりても御覽あれ。調敵の面は知らずとも。おのれやれ一念で尋ね逢はんと方々を。足掛三年さまよひて。地言問ふ人も嵐吹く山のあなたを故郷の。空懷かしく折々は。父母の御身の上いかゞ渡らせ給ふぞと。思ふもよしや我夫の。敵を討たぬ其内は。二度國へは歸らじと迷ひくゝてやうくゝに。今日といふ今巡り合ひ餘所に看なして謂れなき。フシ御身に義理を立つべきか。地色サア甚五郎遣さぬと刀をすらりと抜き放せば。させぬと女房縋り付く。振切れば又後より抱き付いて引戻し。しがみ付き轉び臥し互に。夫を思ひの山劔の山に登り兼ね。フシ倒れさまよふ如くなり。調甚五郎目を怒らし。卑怯の振舞何事ぞ放して討たせと睨め付くる。女房は怨めしげに心得難き詞やな。他人へ義理を立つるのは姑御への命の仇。親孝行の爲ならば逃ぐるが恥でも引てもない。地此場を我に振り任せ立退き給へ我夫と。尙もまさごに取付いて。フシ早う早うとせき狂ふ。調ヲ、尤なり某も。心付かぬにあらねども母の命を今日迄。助けし事も源五が恩。地末期の念力三年の月日と共に小刀の先を巡つて妨ぐれば。とても小町が形をば。作り得ることなり難し。親子の定命只今に逼り切つたる身を持ちて。いづくへ足を向くべきと。フシ動く氣色は見えざりけり。地女房今は諫め兼ね。ア、腑甲斐なのお心や。死人に念力ありとて。親を助くる念力を。いかでか妨げ申すべき。お二人様に成り代り我こそ死なん身の上を。まさご殿にも聞いてたべ。調元私は播磨酒室の遊女に候ふが。あれなる人に思はれて當番非番の別なく。通ひ續けの過りにて浪人なされ候へども。お袋様の納戸金三百兩に請けられて。地借家住居の憂き節も自ら故の事なるぞや。昔の武士にてましまさば細工の難儀もかゝるまじ。三百兩の金あらば夫の惡心起るまじ。源五を殺せし根本の敵といふ此身なり。夫の代りに自らを。討つて思ひを晴らしてたべ。フシ聞分け。給へと口説き立てむせ返り。てぞ歎きける。地色まさごも共に涙にくれ。ナウ歎きも同じ歎き。憂目も變らぬ憂目ぞや。母故沈む身の懺悔。男思ひの物語一人を討てば忽ちに。三人殺す罪科は冥途の夫の身に報い。修羅の苦患となりやせん。七日の命預けるも謂はゞ暫

しの間ぞと。我は了簡致せども。辨へもなき子心に。待遠にかは思はんと。許すもつらし許さぬも。餘りつれなき次第やと。フシ差しうつ。むいて居たりける。地色女房は力を得店に飾りし馬の手綱。引きかなぐりて差出し。調生きては闇を同じうし死しては一つ塚に入る。地身體をお預け申さんと我と後へ手を廻し。フシにつこと笑うて居たりけり。地色まさごも思案付き兼ねて。詞コレ徳太郎敵を討つか此人を預り宿へ連行くか。地分別しやと聞くよりはや纏取つてかひがひしく。高手小手に引縛り。詞ヤイ甚五郎。今日の命は助けてやる。七日過ぎたら此女と。代々するぞと呼ばれば。地見てゐる母も縛らるゝ。女も共に聲上げて。スエテわつと。ばかりに。泣き沈む。地色甚五郎は感涙に身さへ流るゝ心地して。然らば拙者は七日が内一間所に取り籠り。一念力の鑿匏小町が形を刻みたて。お禮はつど。其時と止めぬは親へ孝行者。引かれて行くは心中者。氣の通り者了簡者さらば。さらばも泣聲に。あら味氣なの世の中と。妹脊を歎き恩愛を慕ふ心の諸翼水の。鴛鴦。巢の燕搦みし姿羽拔鳥泣く。見送り留まりぬ。

第 四

フシ月花の。形は筆に寫せども。思ひは繪にも詞にも。オクリ及ばで。積る雪姫が。住居は殊に奥深な。本フシ亭の一間に取籠り。地人も通はず寄付けず。長地見もせぬ顔を兎や角と心も空に案じ佗び机に肘を寄るべなく。只つくりと燈火に照添ふわが姿さへ憂目に細る心地して。更くるも知らぬ脊の間に。一番鳥の知らずれば。はつとばかりに打驚き。スエテつれなの今の一聲や。汝も妹脊の諸翳羽交の下に温め合ふ。玉子の數も五ツ六ツ。フシ十日に限る我夫の命をせめる八つの時。明くれば消ゆる露霜の。それよりも猶あだし世に。生れて憂目を見る事は。宿世何たるフシ因果ぞや。調世界の内に住みと住む人は戀路を樂みに。まだかた若き始より。地八十の老の後迄も缺障なく添ふもある。手づから織れる布機や裁縫ふ業を習ひても。夫一人は養ふに。いかなれば自らは藝に譽は得たれども。明

日の命を繋ぎとめ引止められぬ荒駒の。あら口惜しや悲しやと持つたる筆をからりと捨て
に。歎きしが。地稍あつて手を合せ。南無。日の本の神佛仰ぎ願ひ奉る。別しては弘法大師。フシ御筆の奇特に。小
町の佛影向なさしめ給へやと。一心に祈誓して夢にや見ると手枕に。袖を片敷くところくと
にける。フシ同じ思ひと。浮れ来る。地世は人形の牛車巡る左の甚五郎。細工の外に取添へて身を削らるゝ義理と孝
七日の命氣息の緒もはや切れかゝる夜半過ぎ。人手まぶりに雪姫が。館に紛れ忍び入り。地色あなたこなたと廻廻り
砌も深き扉より。密かに内を差覗き胸を押へ打鎖き。詞ア、少し落着いた。我より先に寫繪を若し仕果せて上げんか
と。地心ならず思ひしに流石名を得し雪姫も。日限今に逼る故物憂き眠りに工夫さへ。疲れ果てたる有様は。いにし
へ小町が帝より。題賜りて言の葉を。案じ入つたる風情かと思ひ出れば我も亦。人目包みに束帯の袖を翳して佇むは。
かの大友の黒主が。歌盗まんと窺ひし。フシ姿も斯くこそあるべけれ。地色それは昔の儂女是は譽れの女繪師。其數
ならぬ甚五郎。二つの道は劣るとも。孝には深き奥の海。フシ白波の名は。立たば立て念力通さで置くべきかと心を
配り。身を潜めつく／＼窺ひ居たりしが。更け行く夜半に何時となく。オクリふらり。ふらりとねむの木。フシ繁み
倒れ臥しにけり。現には。見もせぬ雲の上迄も。夢には通ふ雪姫が。魂姿を飛び出づれば。コハリ心較べの甚五郎
胸より出る思ひの火。二つの魂空中にあなた。こなたと漂うて照り輝けば。ナホス館の内忽ち變じて百敷の。御簾の
隙々凡帳の陰昔を今に。フシあり／＼と。磨き立てたる。玉造小町の榮え衰えを。只身の上に顯せしは不思議に。
も。三重またへ目覺まし。地いで其頃は天長元年彌生の空麗はしき。淳和の帝の御恵み時めく御代の歌の會。紫宸
殿の額の間に和歌三神を勧請し。名香立花綺羅をやり玉座深く見え給へば。左の上座は紀の貫之右は同じく壬生の忠
岑。フシ我も。我もと伺候ある。地色中にも大伴の黒主は日頃小町に意趣ありて。自ら望む歌合せ。フシ晴がましう
ぞ聞えける。地せかぬ氣色に差向ふ小野小町は花鳥の。すさみかしこき色々の。其詞さへ心さへ姿はいとゞ日の本

に。男日照と輝きて、フシ御前にこそ出て給ふ。地色貫之は判者として一々和歌を吟じ上げ。批判の次第ある中に大伴の黒主。雁に寄する戀といふ題に趣向を取結び。詞思ひ出で、戀しき時は初雁の。鳴きて渡ると人は知らずや。地貫之暫し打詠じ歌の程を譬ふれば。薪を負へる山人の。花の木蔭を行き歸り休らふ風情と褒められて。面目顔に黒主。肘押張つて居たりしは。フシ憎體にこそ見えにけれ。地色小町は尙もしとやかに心の奥の水莖の及ばずながら口ずさみスエテお恥かしやと差出せば。地色貫之取上げ見給ふに。詞水の邊の草といふ題に心を思ひ寄せ。地讀める歌にはまかなくに何を。種とて浮草の波のうね／＼生ひ繁るらん。繰返し／＼吟じ終つて感じ入り。歌の姿はいにしへの衣通姫の類にて。弱きは女の品形自然の徳を備へたり。古今の名歌今日の司と判じ定むれば御簾も凡帳もさゝめきて。フシ覺えずどつとぞ褒め給ふ。地色黒主はつつと出て。詞ヤアいかに小町。古歌を盗んで出すならば誰か勝負に勝たざらん。是御覽ぜよ人々と。地懷中したる萬葉集御前に差上ぐれば。貫之取つて押開きよく／＼見れば同じ歌同じ題にて入れである。君を始め公卿の面々。フシ興の。醒めたる次第なり。地色小町は騒ぐ氣色なく萬葉集の古歌は。空に覺えてあるものを可笑しの人の詞やと。書物を取りて繰返し。詞墨新しく候へば洗はせてたべかしと。地思ひ入つてぞ奏すれば。兎も角もとの宣旨を請け黄金の鹽にたぶ／＼と。御手洗川の澄み渡る水を湛へて小町姫。心を籠めて三神の御影に向ひ禮拜し。清き誠の玉襪しつかと結んで肩に掛け。書物を水にざんぶと入れ押浸し。君が代を汀の氷溶けぬれば。苔の露をも洗ふよ。賤機布を玉川に晒す生平の何時しかも。フシ白玉半。繪の盃は。月の影をや洗ふらん。心を洗ふ。御手洗のはとりに立てる二柱。歌の神にてましませばなき名を洗ひ給へや。住吉の。住吉の岸に。生ふなる秋なれや。波に洗はれさら／＼さつと。根は現れて浮草の。文字は残らず消え果て。フシ元の如くになりけり。地色帝を始め月卿雲客。あつとばかりに感嘆あり是を傳へて世の中の。小町が草紙洗ひぞと見榮す。夢は／＼消えて行く。太夫フシ色は日の出よ。戀ざかり。情の晝と名に照りし。スエテ小町は玉の實生えにて。柳の腰も。フシ弱々と。

歌も上手で氣も上手。生けつ殺しつ品物に 小オクリ惚れてへ思ひを深草の其主様と相惚れも。心較べの強弓は。弛み
かゝりし下紐の。寢衣姿やほら／＼と。フシ外面を覗き見給へば。ワキ地色痛はしや少將は百夜の數を還へずし。月に
も行き闇にも行く雨の夜も風の夜も。ステテまして霜雪風の夜も行きては車に刻を付け。フシ通ふ給ふぞ哀なる。
太夫地色小町見る目も痛はしく。御側に立寄りて數ならぬ身を斯く迄に。慕ひ給うて夜な／＼に御通ひこそ嬉しけれ。
日數の満ちし折節は冷え返りたる御肌を。懷て温め歸さんと。フシ笑顔に玉ぞ零れける。ワキ地色ア、忝なやさりなが
ら百夜を通ふ其間には。魂は早や冥途の鬼焦れし甲斐も何あらん彼の錦木の千束迄待ち忍ぶのは昔の事。今の浮世は
氣短く。神佛への立願に百度。参りと申すにも。門前よりも行き歸り其數をだに滿てぬれば。フシ神も納受あるとか
や。地色それに習うて少將もあれなる車のほとりより。扉の下迄行き通ひ百夜の數に都合せば。今宵を過ぎぬ御情
フシ頼み。入るとぞ極き口説く。太夫色小町もさすが。誘ふ水。浮れ心に打笑みて實に耳寄りの御談合。誓ひし數だに
合ふならば百夜も一夜も變らねど。雨雪霜の厭ひなき心の奥の知れ難し。それにも 理候ふか。ワキ詞成程それも心
得あり。百夜重ぬる心にて姿を變へて参るべし。地今宵は空も晴れたれど君が心のまだ解けぬ。雪に降られて行かう
よ。雪に取りても様々の。薄雪淡雪春の雪。所は名に負ふ伊吹山。ステテ佐野の渡りにあらねども。大和河内は綿の
夕暮。アン／＼温さうなる腰付よと。ぢつと凭れて。戯るれば、太夫フシ小町はびんど立退いて。百夜の數を。待兼ね
て人は無げなるお詞や。空に知られぬ。雪ならば。仇に散行く花の雪。誠少き人心。ステテ只うか／＼と積られて。
肌の雪の程もなう。とくれば元の水臭き。フシ男はいや／＼と。答へける。ワキ地色コレ水臭いとは宜へども。少將程に
身を襲し戀慕ふ者あるべきか。太夫詞あるとも／＼上がある。地昔用明天皇は。玉世の姫を戀ひわびて。いつしか帝
位を振捨て、山路が草刈笛とて。世の諺になり給ふも。フシ戀故にてはあらざるや。ワキ地色げに誠過つたらば雨夜
に通はんと。車のもとへ立戻れば。太夫小町も今は濡衣。袖打翳し物陰に フシ忍びて。様子を眺めある。ワキ山城

の木幡の里に馬はあれど。 オクリ君を。思へば徒歩蹠。さて其姿は簑に笠。フシとは云へ何も着もせずには。梅雨夜の詮が立ち憎いはてどうがなと立舞ふを。 太夫小町はそつと後より上衣を脱いで打掛くれば。ワキ少將はぞつとして。嬉しさを何に喩へんから衣。下行く水の湧き返る。思ひを休め給へやと フシ袂に。縋り泣き佗ぶる。 太夫地小町も色に染糸の亂れ心に手を締めて 引二上り歌闇の夜に。鳴かぬ鳥の。聲聞けば。縁がないかと心にかゝる。縁がなければ恨みもないに。添うて見たらば面白さうな。男ぢやと見て。わしから思ひ。結ぶ絆につい繋がれて。通ひ車は思ひの種かいの。根から厭なら添ふ氣ぢやないに。欺さ。れた ナホスフシ好いた男と袖鬪し。二人フシ春は子の日に。引連れて。葦浦公英土筆 オクリ摘みてふ袖も數々に花見戻りの酒機嫌。あのもののゝに千早振三井の古寺 フシ鐘はあれど。 地色昔に還る聲は聞えず。 ワキハア南無三寶東が白んだお百度始めよ。 太夫そんならわしも連立ち行かん。ワキ濡淨衣の袴搔取りて。く立烏帽子を風折。 太夫歌紅裏白裏一つに搔取り。ちよこく走り ナホス行きては歸り。歸りては行く一遍二遍。三遍五遍。鶏も鳴けく。鐘も鳴れく嬉しや今は。九十九夜になりたり。あな苦し眩暈や胸苦しやと悲しいて。車の陰に伏すかと見れば。形も忽ち フシ消えてけり。 太夫其怨念の取付いて小町は心惚れ惚れと。是なうくと歎き迷ひ西へ走り東へ行く。狂ひ車のわれかあらぬか行方知れずへ消えて行く青黛誰か常あらん。膚に凍梨の梨を抱く。盧生が夢の戯れと。賢き人は驚かず。迷へる者は來し方を。ナホスフシ慕ひ泣くこそ愚なれ。佗びぬれば身をうき。草と浮れにし。それさへ今は。昔にて。小野とは言はじおのづから惜まぬ命長らへて。辛きを止むる關守に。幾百歳をふる姥は。小町が果の名なりとて。笑ふ人目も恥かしく。 スエテ面を隠す破れ笠。後に負へる袋には。フシ飢を。助くる。菱烏羊。木の實取らんと道のべの。櫓の本に立休らひ。五月待つ。花橘の香を嗅げば。昔の人と。詠めしに我は。ハルフシ梢の秋待ちて。 ハズミ命を繋ぐ。外なしと。 地色杖を上げ拂ひし時。袖に落ち來る栗柿のかつを遅しと待顔に。 地むらくばつと落來れば小町は人に取らざじと爰に。立寄りかしこに轉び。千歳

の坂と祝ひしは。老を養ふ母の杖是はまた。篠竹の。いさゝ村竹かり竹の。杖に木の實も打たれて力なみあなたへよろり。こなたへよろりよろり／＼よろ／＼よろと。走りさまよふ身の行方こそ。フシ悲しけれ。ナウ。物賜への旅人。お錢たべの旅人。歌それがならずば水松樹のましろの木。大小柑子金柑などでも。ナホス苦しからぬよの。狂ひ戯れかつばと伏し。フシむせ返り。てぞ泣き居たる。詞ハア餘りに苦しく候程に。是なる朽木に腰を掛け暫く休まうするにて候。ワキ地然る所に向ふより世を雲水の定めなき。且過の僧の一人旅通り合せて見るよりも。謡詞ヤいかに老女。お事が腰掛けたるは。忝くも佛體色性の卒都婆。そこ立退けとありければ。太夫愚かの仰せ候や。スエテ古き歌にも唱ふれば。佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の。フシギンオクリ聲ばかりして。身佛隔てなき上に文字さへ見えぬこの朽木。勿體なしとの心はいかに。ワキ詞イヤ／＼汝が引歌は至り至れる智識の詞。地又中頃の俳諧句に。搦粉木よ。我も昔は櫻にて。是僧凡夫の見解なれ早や／＼そこを去れよとこそ。太夫ナウ我とても月花と立並んだる顔形。鬚髪に蘭麝を燦らせて。舞錦の帷温かに。ナホス隙間の風を暖ひしに移りに。フシけりな徒らに。道のほとりの。埋れ木と。朽ち果てし身は行交ひに。長袖袖もとて引かざればおのづからなる世捨人。佛になどか遠からん。ワキ詞ソレハ世にこそ捨てられたれ。世捨人とは可笑しの詞。地ナウ煩惱菩提は月と影戴く桶の底抜けて。フシ水溜らねば月も宿らず。迷ふが故に凡夫あり。ワキ地悟の前には佛もなし。太夫變むるは順縁。ワキ誹るは逆縁別なき法心性。太夫誹げに本來一物なき時は。ナホス佛も衆生も隔てなしと懇に申せば。ワキ地僧は狂女を禮拜しさらば。フシさらばと云ひて立退けば。太夫地小町も今は是迄なりと杖に縋りて。よろ／＼と立別れ行く。袖の涙の關寺や。鸚鵡返しその一字。苔の衣を清水の。物言ひ交す七小町。七つも過ぎて六つの鐘。フシ夢は。忽ち醒めにける。地セメ雪姫むつくと起上り。懸て墨すり筆を取り亭に剪めば。ワキ籬にも。同じ夢見し甚五郎。二人いそ／＼我が家へ立歸る。手の舞ひ足の踏み所知らぬ業をも孝行と。太夫貞女一つの提げ較べ。ワキ細工は左。太夫繪師は右 二人い

第 五

づれが重き晴勝負前代未聞後々末代。小町が姿の。手本なるわと世以つて。是を賞翫す。

地地の麗はしきは稻を養ひ君の仁あるは士を養ふと云へり。されば富仁親王は御違例快氣ましまして。朝政怠り給はねば。共に賢佐の功烈しく。關白兼定其外卿相残りなく。フシ肅然として伺候あり。地御隨身には膳手織部應官雜仕に至る迄。威儀をあらせて相詰めしは。オクリ由々しくへも。フシ亦晴れがまし。地色かゝる所へ甚五郎まさご親子を伴ひ。庭上に畏り。詞私儀は人形屋甚五郎と申す者。勅命を蒙りし日限相違仕らず。細工を調べ奉ると小町の像を御階に据ゑ。謹んでこそ言上す。織部は顔を打守り。ヤア推參至極のえせ者。小町の形は雪姫こそ勅諭を承り。夫の命を救はんと思ひを籠めし工夫にさへ。畫き能はぬ姿をば名もなき小刀細工にて。作りしなどは胡亂なりそこ立去れとぞ罵りける。甚五郎むつとしてイヤ胡亂とは宣へども。繪に畫き又は木に刻むも工夫に二つあるべきか。雪姫夫を悲めば此方は又母の命。地助けんための念力故忝くも弘法の。御夢想を得し傳授の形毛變違ひ候はずと。フシおめず臆せず云ひ放す。地色兼定立寄り木像取上げ。げにも小町が顔形生けるが如き細工の妙。神妙々々さりながら。詞此儀に於て他の者に宣旨あるべき仔細なし。何者に頼まれし様子を語れと宣へば。甚五郎手を束ね。先月廿五日の夜密かに御殿に召し出され。勅命ありし趣は申すも餘り畏れあり。人質として老母をば内裏に縛め置き給ひ。地即ち後日の證據とて御衣をば下し賜はりぬ。御覽あれと差出す。詞ヤア野太い下郎め。天子よりお頼みとは跡かたもなき偽り。先月廿五日の夜は狛の舞樂を觀覽にて清涼殿に相詰め。終夜外の御沙汰なし。地色其上此御衣汝等が手に入る事。此頼み手は此方に心當の詮議もあり。詞ソレ擲めよと聞くより早や雜人立寄り押伏せて。フシ敢なく繩をかけにけり。まさご驚き差寄りて。詞憚りながら自らは度會源五が妻。是なる者に夫を討たせ此如く附添ひて。今日本望

送ける筈。然るを召捕り給ひては誰を敵と狙ふべき。地甚五郎一命を妾に下し給はれと。スエテ涙を流し言ひければ。詞兼定は聞きも敢ず。其源五めこそ某が以前の家來。こしやく者故有職の道をより／＼教へしに。地色奥儀を極むる慾心萌し代々傳はる家の秘書。並びに君より拜領の。詞コレ。此御衣を盗み取り。行方知らずなり行きしが。其後聞けば蟠海が謀叛に與し剩さへ。内裏の造營法式迄きやつめが指圖致せし由。扱は御衣をも蟠海に渡せしは必定。地色是ぞ逆心一味の證。妻子とても逃れなしつかと括れと下知あれば。承ると立ちかゝり親子も繩目に及びしは。フ思ひがけなき有様なり。地かゝる所へ雪姫あわたくしく兼定公の前に出て。小町の繪を差上げ。詞かねて宜旨を請けし妾繪調へ参り候なり。地觀覽に入れ給ひ。片時も早く我夫の。命を助け。フシ給はれと思ひ入つてぞ奏しける。地色兼定公つく／＼と細工と繪圖を引較べ。詞ヤアをこがまし雪姫。元來汝が寫繪の虚實を糾さん其爲に。勅に従ひ先達て高野山に立越え。弘法大師の眞筆を再三拜し参らせてとつくと記憶してあるが。ハヤ先達て細工の像髮筋程も違はぬ名作。それに同じき形をば遅れて上ぐるは贗物同然。かゝる粗忽の仕業より事延引になるくだり。地宸襟を惱まし宣旨を黙す重罪安穩にて置くべきか。詞ソレ織部搦め捕れ。畏つて立上り。フシ泣く／＼繩をかけにける。雪姫わつと泣き出し。思ひを碎き身を慙らし夫を慕ふ冥加により。二つともなき繪像をば夢想に大師に授かりしに。誰が先達て上げけるぞ不思議さよ淺ましや。夫婦が縁も是迄かとかつばと伏して泣きければ。地甚五郎も堪へかねて雪姫に差向ひ。詞ヲ、先を越されし残念の歎きは嘸と思ひやる。何を隠さん其方の工夫を慕ひ館に忍び。窺ひまどろむ其内に夢想に受けたる此細工。地然れば深き妄念の。盗人は某。非道に身命溺れしも。母を助けんためなるに。我さへ死する運なれば。恨みらるゝも恨むるも。共になき浮世ぞと。スエテ男泣きにぞむせび入る。地色然る折節蟠海は。師國時夜叉隨へて。オクリ悠々とこそ。地色出て來り兼定公に打向ひ。詞改めて蟠海を参内せよとは何事の。趣きなるぞとありければされば。此度僧都の加持大護摩の徳に依つて。親王御惱平癒あり感悅の餘り。今日より大僧正の位階を

授け給はる。綸旨目出度く領掌^{りやうしやう}なさるべしと披露ある。蟠海ムウ懇志^{こんし}の程過分なりと。地挨拶の内甚五郎目を離さず。蟠海の。顔打守りはつとばかりに聲を掛け。詞何時ぞや天子と偽つて細工を望むは御坊よの。ぬく／＼と騙されて今の憂目は何事ぞや。地サア母を返してたべ。エ、怨めしい腹立つと スエテ怒りの涙せき敢ず。地色まさご雪姫聲震はせ。あら憎や情なや。皆是御坊の惡心より。いづれも非法^{ひはふ}の最期の恨み。思ひ知らさて置かうかと。三人一度に口説き立て フシ大聲。上げて歎きける。詞蟠海ちつとも騒がず。ヤア甚五郎。親王と偽りしは紛れもない某。は何故ぞ。天子として戀慕^{けんぼ}に死するを救はんため。暫く王位を學んだり。斯程に慈悲を惠む我。何しに契約違へんず。地それ／＼師國召人^{しこくめいじん}引けと聞くより早や。甚五郎が母と妻繩付ながら連れ來れば。親子三人顔見合せ フシ先立つものは涙なり。地色蟠海二人が繩を許し。母が義は勿論。女房迄を尋ね出し供し來つて相渡す。サア請取れと詞の下。甚五郎は頭を下げ忝しと一禮す。母涙ぐみ頭振り。たとへ此身は遁るゝとも。我子死すれば生き甲斐なし。繩掛け給へと掻き口説けば。地女房も物憂げに。フシ互に。義信^{ぎん}を立つるにぞ。詞蟠海は打領き。ヲ、さぞあらん／＼。コレ兼定。召人ともが一命を我に免じて助けてたべ。甚五郎は偽りにも天子の詞を重んじて。細工を挑むは忠の道。地色雪姫事は親王が病になる程戀ひ慕ひ。今又罪に附せんとは照る日の曇る政道。何にもせよ慈悲は上から助くるは法のため。思ひ立つた命乞ひ是非貰うたおくりやれと。フシ只一筋に言ひかくる。地色兼定公開きもあへず。詞和は仁の基なれども刑罰^{けいばつ}なければ亂の端。利益^{りやく}の道はお僧の役。朝政は又臣等が役。其上綸言還らずと。地云はせも果てず蟠海綸言を取り出し散々に引裂き捨て。ヤア綸言の綸旨のとは王法を立つる上。濁れる祿^{ろく}を何かせん。否でも應でも貰ひかゝつた召人。ソレ師國時夜叉と聞くより早く匿寄りて フシ皆縛めを解きにける。詞雪姫は差寄つてコハ忝き御心やされども妾^{わらわ}が身の上より。地悲しきは夫の命お救ひあれと手を合す。詞兼定は聲を上げ。ヤア不覺^{ふかく}なり雪姫。汝が心怠る故最後の日限極つて。千王は今朝曉早速討つて捨てたりと。フシ聞くより雪姫あつとばかりに倒れ伏してぞ泣き居た

り。地蟠海は大手を打ち。彼奴めを殺さんばつかりにえいやつと骨折りしに。世界は廣しと立上り玉座間近くどつかと坐り。詞ヤイうつそりども我こそは謀叛の骨張。かねて源五と心を合せ時の變を窺ひしに。地今蟠海が開ける運親王其座を立去れと御簾引きちぎればコハいかに。思ひも寄らぬ千王丸仁王立ちにつつ立つたり。雪姫を始め滿座の人フシ再び驚くばかりなり。地色蟠海狼狽へ逃げ廻るをどつこえやらぬと躍り出て。其儘繩をかけければ織部も續いて立掛かり。師國時夜又兩人を捕つて伏せ働かせず。縛り上げて突据多たり。地かゝる所へ親王は出御まします御有様丈に餘れる下髪に十二重の優姿始めて女帝と知られたる。兼定は悠々と蟠海に差向ひ。詞エ、是非もなき行跡やな。天性不道にまします故天子を女帝と知らせなば必定輕しめ謀叛の種と幼少より。皇子と稱し剩さへ。此度の無體の戀慕も。御身の疑ひ避けんとの企て。地猶も惡心探らんため刑罰烈しく取行ひ。第一は千王が死したりと聞き給はゞ。虚に乗ずるの謀叛の色現れんと。計るところ案の如く此仕合せ。今此繩目に愧ぢ給へと。フシ理立てゝ制せられ。蟠海は差詰り詞も出ず赤面す。地帝御氣色穩かにいかに兄宮。詞同じ血筋の帝位をば左程迄疎み給はずとも。女のすなるまつり辛苦を憐み縁となり。地惡心止まりたべかしと。スエテ御涙にくれ給ひ。地暫くありて。ヤア雪姫。詞我故様々の難儀は不便ざりながら。たまぬ思ひは目の前の女姿に明けし。地色さて又汝が小町の圖。佛神擁護の筆の妙。感ずるに餘りあり。向後朕が繪所と譽を世上に知らすべし。地甚五郎も雪姫に同じ恵みの細工の像。何れも稀代の重寶たり。褒美として日の本の細工の司と銘すべし。詞次にまさごは夫に違ひ。神妙の志。甚五郎を狙ふ由度會源五は朝敵故たとへ討たでも遁れぬ命。地汝が事も夫につれ重類を絶つ罰なれども。貞節に免じて命を助け稚子を瀧口に召し出し。詞度會源五と改むべし然れば夫は蘇生の心。其上何の敵あらん。地必ず仇を残すべからず。皆々其旨心得よと。云ふに妙なる綸命に。フシいづれもはつと感じける。詞兼定は詞を正し御同胞とは云ひながら政道は背かれず。地蟠海僧都は隱岐の嶋へ遠流せしめ。さて又師國時夜又は臣として君を諫めず。朝敵となる大罰禁外へ引出し刑

戮^りに行へと仰せを請けて追ひ立つる。是を手本の善の綱。僧都を慫^{こま}し我君を祝ふ御國は忠臣あり孝行あり貞節あり。藝^げ能^{のう}迄も滿ち／＼て榮^{さか}行く。春こそ久しけれ。

右之本遂吟覽頌句音節墨譜等不違毫釐令加筆且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也

豐竹上野少掾

作者 紀 海 音

大坂上久寶寺町三丁目

正本屋 西澤九右衛門版

富仁親王嵯峨錦 終

